

服飾様式の変容と文化領域

—日本海域としての新潟の視座から見た—

山崎光子

(県立新潟女子短期大学)

はじめに

地球は小さくなったといわれる。世界中の情報は瞬く間に地球を駆けめぐり、いま地球時代を迎えようとしている。そして日本海域でも、島国日本と、対岸の大陸の国々との間にあった、冷たく重い歴史のベールが次第に剥ぎ落とされ、環日本海時代の幕開けとなった。新潟県も、日本海沿岸の地理的中枢に位置する特性を生かして、日本側の拠点に新潟市を据えることをめざして種々の企画をたてて始動している。

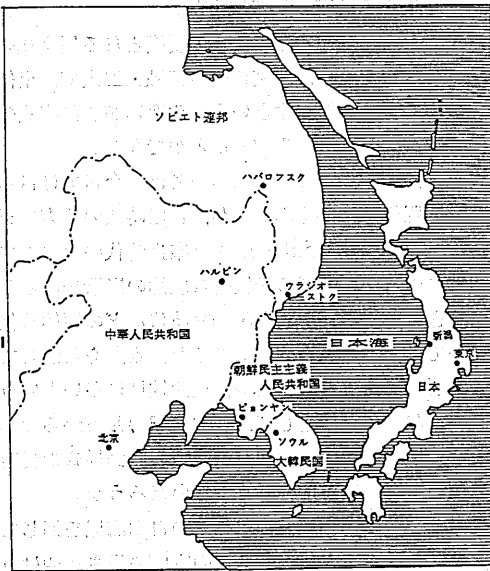


図1 環日本海と新潟

しかし、環日本海圏の人々との交流をはじめて感ずるのは文化の違いである。日本海を共通の内海として囲む国々ながら、それぞれが互いに意志の伝達のできない言葉を持ち、異なる生活習慣を持っている。衣服に関しても、ロシア連邦、中華人民共和国、大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国と日本とでは、伝統的な民族服飾の異質性が際立つ。それらの違いは、よって

たつ国々の文化の差異によるものであろう。

この文化と生活様式は、切り離せない関係にある。文化とは、「歴史的につくられた、外面的および内面的な生活様式の体系であり、ある集団の全員または特定のメンバーによって共有されるもの」とアメリカの文化人類学者クラックホーンは定義しているが、それぞれの時代にそれぞれの地域で生きた人々の物心にかかわる生活様式そのものが文化であり、また、その所産としての事物（例えば衣服なども）の様式が文化であらう。

ところで一つの文化は、ある時代のある地域という文化領域のなかで育まれるものであるとは言っても、その文化の型は不変のものではない。「異文化を持つ集団と集団の間の持続的、直接的な接触により、異文化の包摂、変動が行われ、もとの文化の型に変化を起こす現象」という文化変容¹⁾が、なだらかに行われることはよくみられる現象である。

ここでは服飾²⁾の様式を、筆者の居住する新潟を視座の中心に据えながら、時代性という縦の時間的な流れの中での変容と、地域性という横の空間的の広がりの中での変容とをとらえ、その文化領域とのかかわりを考察しようとしたものである。

注1) 「社会学辞典」824頁 有斐閣

2) ここでは衣服を機能性から離れて文化的所産としてとらえ、装飾性も包括するものとするため、衣服にかわって服飾の用語を用いた。

I 日本の服飾様式の時代的変容と環日本海圏

服飾様式の変容には、時代性と地域性が大きくかわるものとみだが、まず経時的な歴史の流れについて取り上げたい。

わが国の服飾史の様式は有史以降はほぼ定められており、それは各政治的区分にほぼ添って、各時代ごとに異なる服飾様式が揚げられるほどに変化に富んでいる。歴史的にみても、わが国在来の文化領域に異なる文化領域に文化が接触し、その包摂により文化の型に

変動をきたす文化変容が起こったものであり、服飾についても同様であろう。

各時代ごとに推移していく服飾様式は³⁾、旧石器・縄文時代は腰布衣様式やその他の各種様式の混在、弥生時代の貫頭衣・横幅衣様式、古墳時代の衣禪・裳様式、奈良時代の袍袴・裙様式、平安時代の束帯・袿様式、鎌倉・室町時代の上・下衣様式、江戸時代の小袖様式、そして明治・大正・昭和の和洋混交様式をへて平成に至る。

3) ここでは、古墳時代以降は主として北村哲郎氏の分類(「日本服飾史」衣生活研究会)によった。もっともこれは歴史も表面に現れた上層階級の服飾が主体となる。外来文化の受容については、奈良期の唐の服制の模倣や明治期の洋服の移入など、すでに二・三期があげられているが、改めて環日本海圏の視点で注目できないものだろうか。

移入された異文化領域と比較しやすいように、服飾様式の型を基準となる要素を定めて分類すると⁴⁾、容易には分けがたい時代もあるが幾つかのパターンに分けられる。

それは、原始時代のLigature typeやDrapery type・Poncho type・Tunic typeを別とすれば、Tunic type・二部式衣・西洋服系、Kaftan type・一部式・東洋服系、Kafan type, 二部式衣, 東洋服系などと比較的単純に分類できるように思われる。

服飾の様式の型は、二部式衣と一部式衣が小さなうねりをもって、あるいはTunic typeとKaftan typeが、また西洋服系・東洋服系がやや大きなうねりをもって繰り返していることが分かり、そして原始期の多様性とは異なる意味での、今日の文明期としての多様化の時代をむかえようとしている。

4) 服飾様式の型の分類には寛衣や窄衣などいろいろあるが、すべての服飾様式の内容を網羅しがたい。ここではとりあえず、服飾様式の分類として、菅原教造氏(「服装文化論」P41文化服装学院出版局)と、小川安朗氏の分類(「民族服飾の生態」P26東京書籍)をもとに、①Ligature type(腰布型)・Drapery type(掛け布型)・Poncho type(貫頭型)・Kaftan type(前開型)・Tunic type(体形型)、②一部式・二部式、③西洋服系・東洋服系等の要素を設けて基準とした。さらに、変容の要因を、服飾様式の型の分類をふま

え、抱撰されていく異文化領域⁵⁾との関連において時代を追ってとらえると、およそ次のようになるであろう。

旧石器・縄文時代は自然発生的様式のほか周辺の異文化領域様式の重層的移入、弥生時代は東南アジア・東アジア文化の影響、古墳時代は北方アジア文化の導入、奈良時代は東アジア(唐)文化の受容、平安時代は日本文化(公家文化)の創造、鎌倉時代は日本文化(武家文化)の展開、室町時代は日本文化(下剋上の文化)の成立、安土・桃山時代はヨーロッパ(南蛮)文化の刺激、江戸時代は日本文化の成熟(町人文化)、明治・大正・昭和時代は欧米(西洋)文化の導入、そして平成の時代は国際服と民族服の並立する地球文化の時代と言えるのではないだろうか。

5) 変容の要因となる異文化については、国外の外来文化の移入によるとすることが一般的であるが、ここでは同じ日本の文化領域内でも支配者層の交替によって起こる変化も異文化による変容として加えた。

国内のものも含めると、変容の要因となる異文化の種類はきわめて多く、異文化間の接触・導入で、全体文化の型の変化を起こすという文化変容を服飾様式の展開を通して顕著に読み取ることができる。

環日本海圏の各国の服飾については、今日では日本の伝統的服飾とは全く異なるが、古墳時代の北方アジア系服飾にロシア文化領域を、また奈良時代の東アジア系服飾に中国文化領域の伝統的な服飾の影響をみることができる。また、旧石器・縄文時代などの原始時代については、考古学分野であるが、衣服を着装していると思われる土偶の様式や、東北地域に多いという出土状況などから推察して、日本海域の北方からのルートをとっての大陸文化領域からの服飾様式の受容を見逃す訳にはいかないのではないだろうか。

日本の歴史の基底部分においての日本海域を通じての、日本とアジア大陸との交流の密度の濃さがやはり服飾様式の内容から窺うことができる。

II 地域性からみた服飾様式の文化領域とその変容

さて次に、文化領域と服飾様式とのかかわりを、日本国内を対象として、地域性という横の広がりの中にとらえてみる。

資料は、筆者のこれまでの新潟県内のフィールド調査や、それを全国的視野で位置づけようとした研究の

成果などを用い、視点を本テーマに合わせて構築したものである。方法論的に資料を用いるため、内容の詳細はやや簡略にした。引用論文名は末尾に資料a)～v)としてしめた。図の大半は、それらのなかから抜粋したものであり典拠を記した。

なお新潟県の佐渡は、歴史的地理的環境からか、新潟側とはやや異なる特種な様式をもつため、今回の新潟県とは、上・中・下越地区を主体とした。

1. 東・西日本の文化領域と境界線

東西に長く連なる日本列島の服飾の様式は、北方系閉鎖型二部式の東日本と南方系開放型一部式の西日本などと分けられたり、また物質文化の分野では、東日本のモンペ・モモヒキ、西日本のフンドシ・コシマキなどとも分けられている。

たしかに、全国の仕事着の下衣を、各県を一様式にとらえれば、従来いわれているように東の山袴地帯と西の腰巻地帯の二つの文化領域にほぼわけることができる。

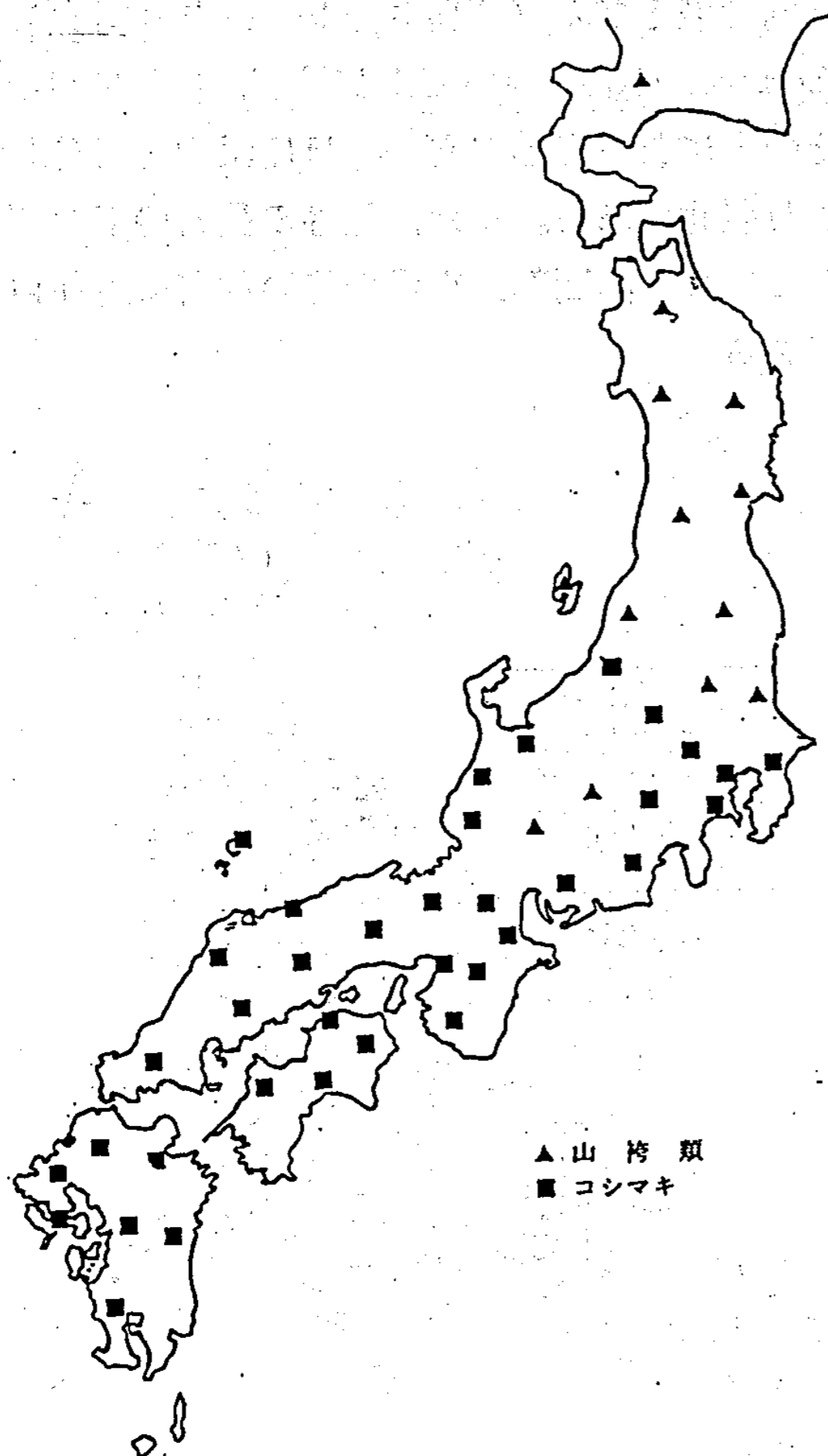


図2 東日本の山袴類と西日本のコシマキ
(資料jの全国の調査結果)

しかし、仕事着の全国規模の調査資料に基づき、その下衣の用いられている種類の状態をきめ細かく分布図に描くと、安易には領域分けの境界線を描くことができなくなる。

女性の仕事着の下衣については、図でもわかるように、東北地方に多いヤマバカマ類は、日本列島の山間部を縦断して点在し四国にまで至っていることがわかる。そして西日本のコシマキ地帯も九州に至ると三幅前掛けがコシマキに替わって用いられている。全体的には関東以北のモモヒキ地帯と近畿以南のコシマキ中心地帯にわけられるが、両者の間にモモヒキと腰巻の併用の幅広い境界領域があるようにみえる。

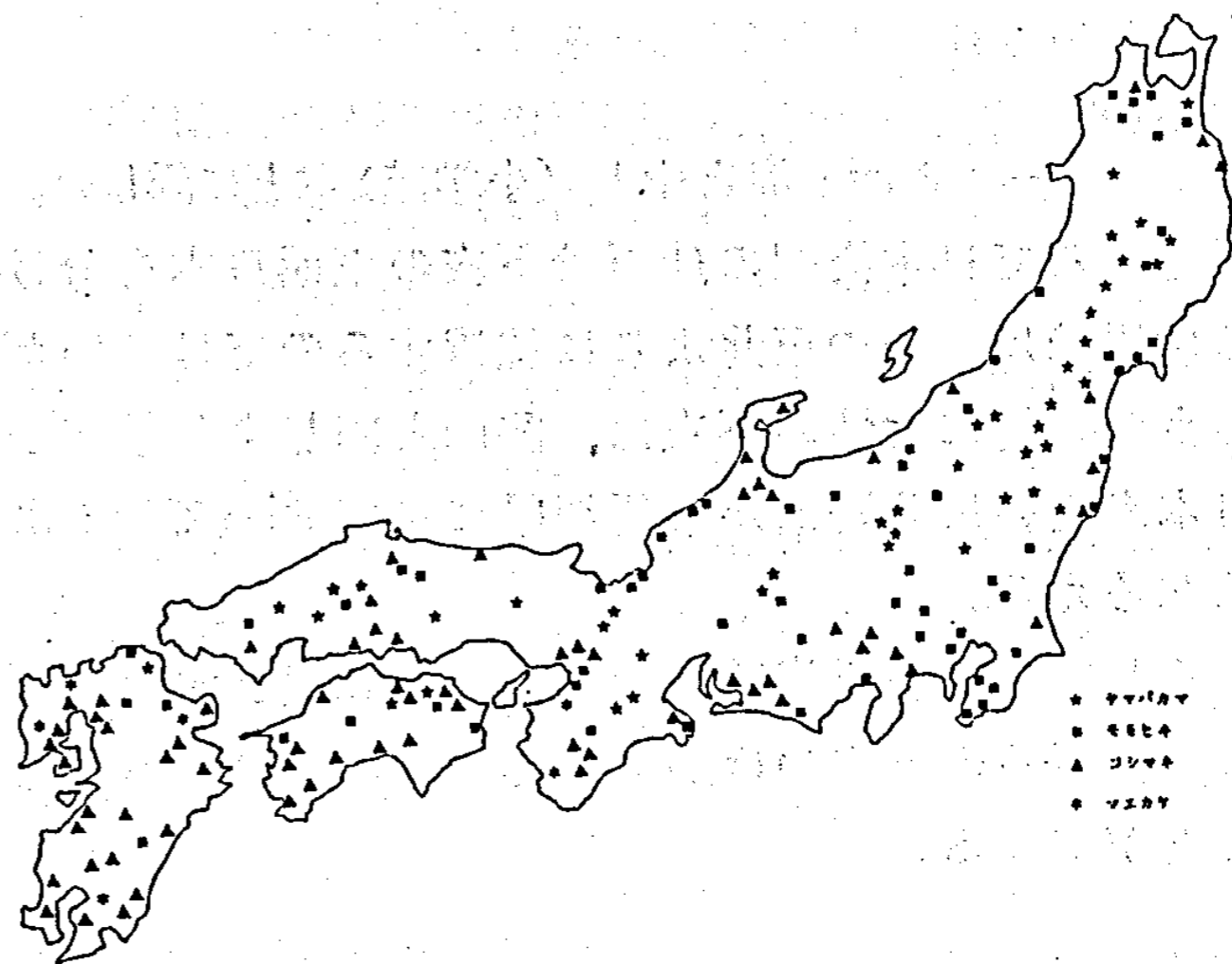


図3 全国の仕事着の分布—女の下衣—
(資料p-76頁)

男性の仕事着の下衣についても、ヤマバカマ類は女性と同傾向であり、女性より早い明治期から普及しはじめたモモヒキは全国に均等に普及しているものの、半モモヒキとフンドシが女性のモモヒキとコシマキの関係とほぼ似た傾向を示し、やはり東西日本の間に幅広い境界領域をもっている。

「文化領域の境界線は必ずしも一律ではなく、ある程度の幅をもっている」⁶⁾といわれているが、まさにそれに該当するのではないだろうか。

6) 文化領域は「ある一定の時期に、その領域内の多数の社会が多くの類似した文化要素を共有していることが、他の地域と比べたときに明らかになるような領域」で、その境界線は必ずしも一律ではなく、ある程度の幅をもっていると言われている。それらについては大林太良氏の見解に沿った。「日本の文化領域

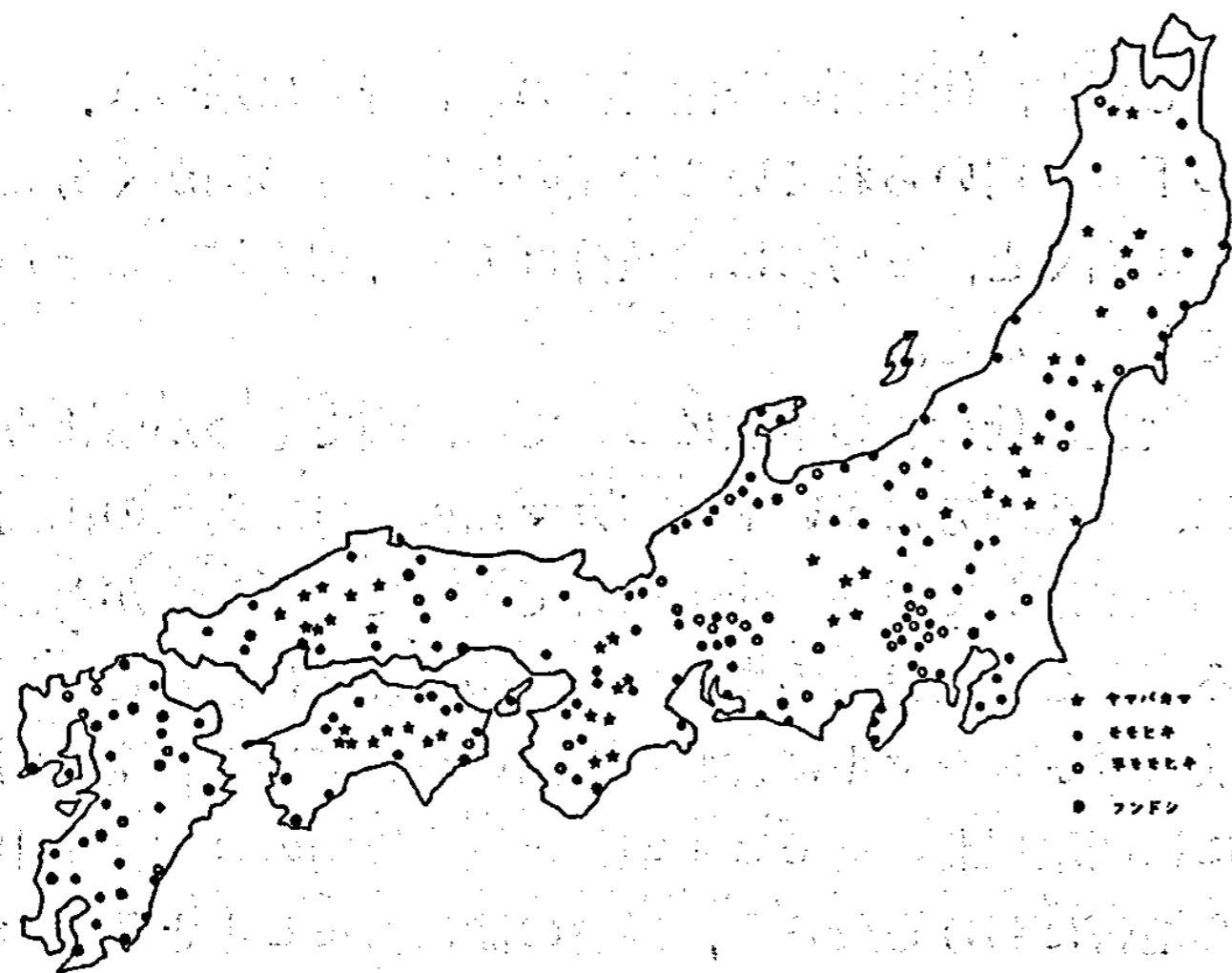


図4 全国の仕事着の分布—男の下衣—
(資料 p - 77頁)

—東と西・海と山— (小学館) などに詳しい。

ところで日本海側の仕事着下衣の東西日本を分ける境界線は、やや東北よりに位置するのではないだろうか。特に女性の下衣は、関西と同じ文化領域が日本海沿いに北陸道から新潟県にまで到っているようにみえる。

そして、この新潟県を境界領域の北限とすることは、仕事着の下衣のほか、覆面頭巾についても見ることができる。

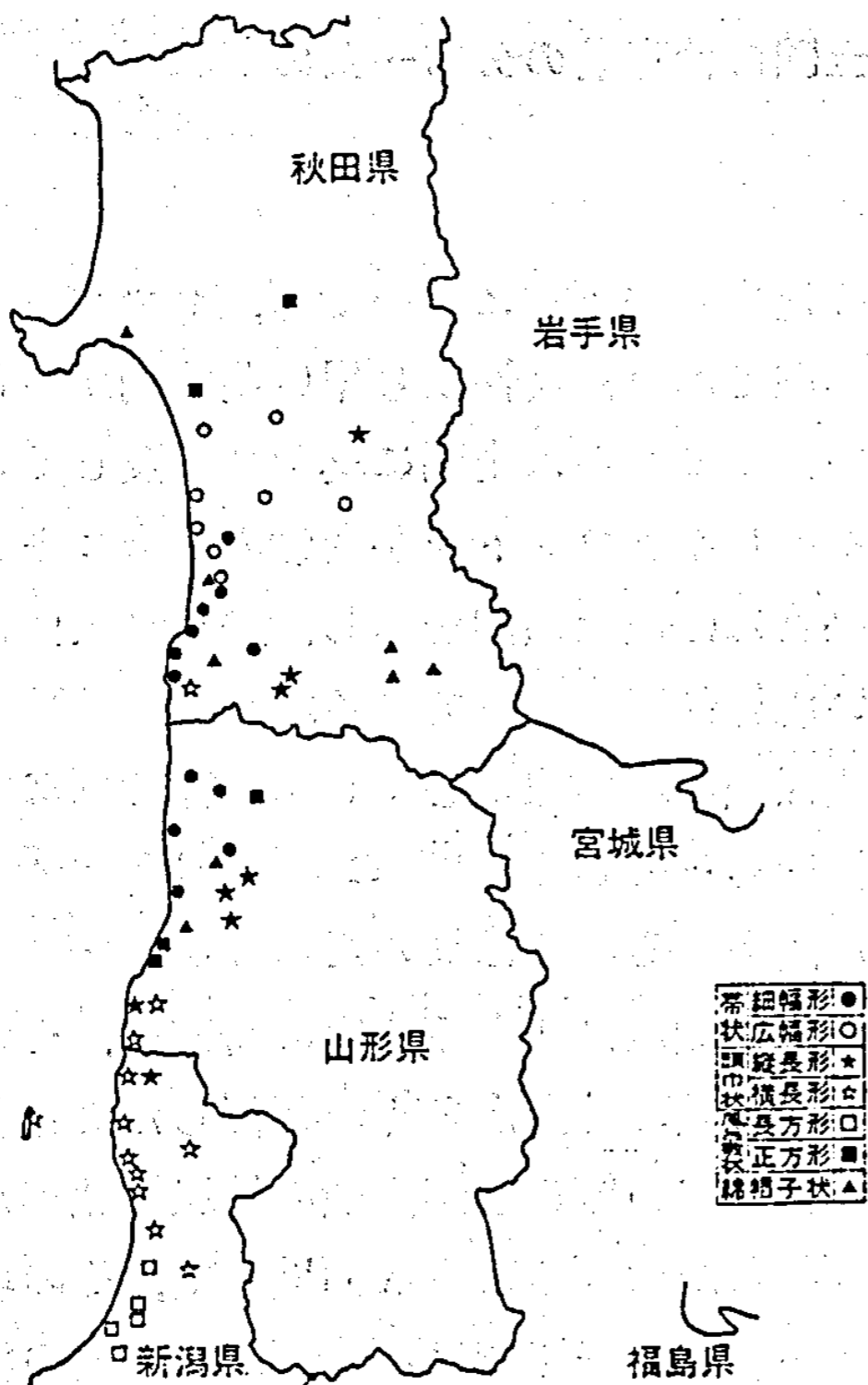


図5 東北日本海沿岸の覆面頭巾の分布
(資料 g - 100頁)

作業用覆面頭巾は東北日本海沿岸に分布しているがこの覆面文化領域は秋田県から新潟県の県北部までであり(資料 b-46~47頁 n-47・467~471頁), この場合逆に、新潟県が覆面頭巾をかぶらない地域の北限となる。

関西・北陸地域からのコシマキ分布の境界線と、東北地域からの覆面頭巾分布の境界線という、服飾様式の変容を分ける境界領域が、長い日本海の海岸線をもつ新潟県内にあることになる。

2. 日本海域側の境界領域としての新潟地域

それでは新潟県内の仕事着はどのように分布しているのだろうか。

図6・7は衿型と袖型の分布で、新潟では、農山漁村を問わずジューパン衿・筒袖が多いが、特に、新潟県の県北部に片寄って多く見られたものにジューパン衿風カゲ衿があった。これは用布を節約しながらも、外見は普通のジューパン衿に見えるように丁寧に衿をつまんで仕立てるもので、日焼け防止の意味もあって破る覆面の美意識と共通するものがあり、地域的にも覆面頭巾領域と同地域となる(資料 b-48頁 h-37頁)。

そのほか、衿型についてカゲ衿が、袖型ではテッポ袖とその上に着る半袖などが、ほぼ県内を二分しての中央より以北にある。また、巻袖の長着のドンザ類は海浜部にあり、山間部、平場の違いなどにも注目する必要がある。

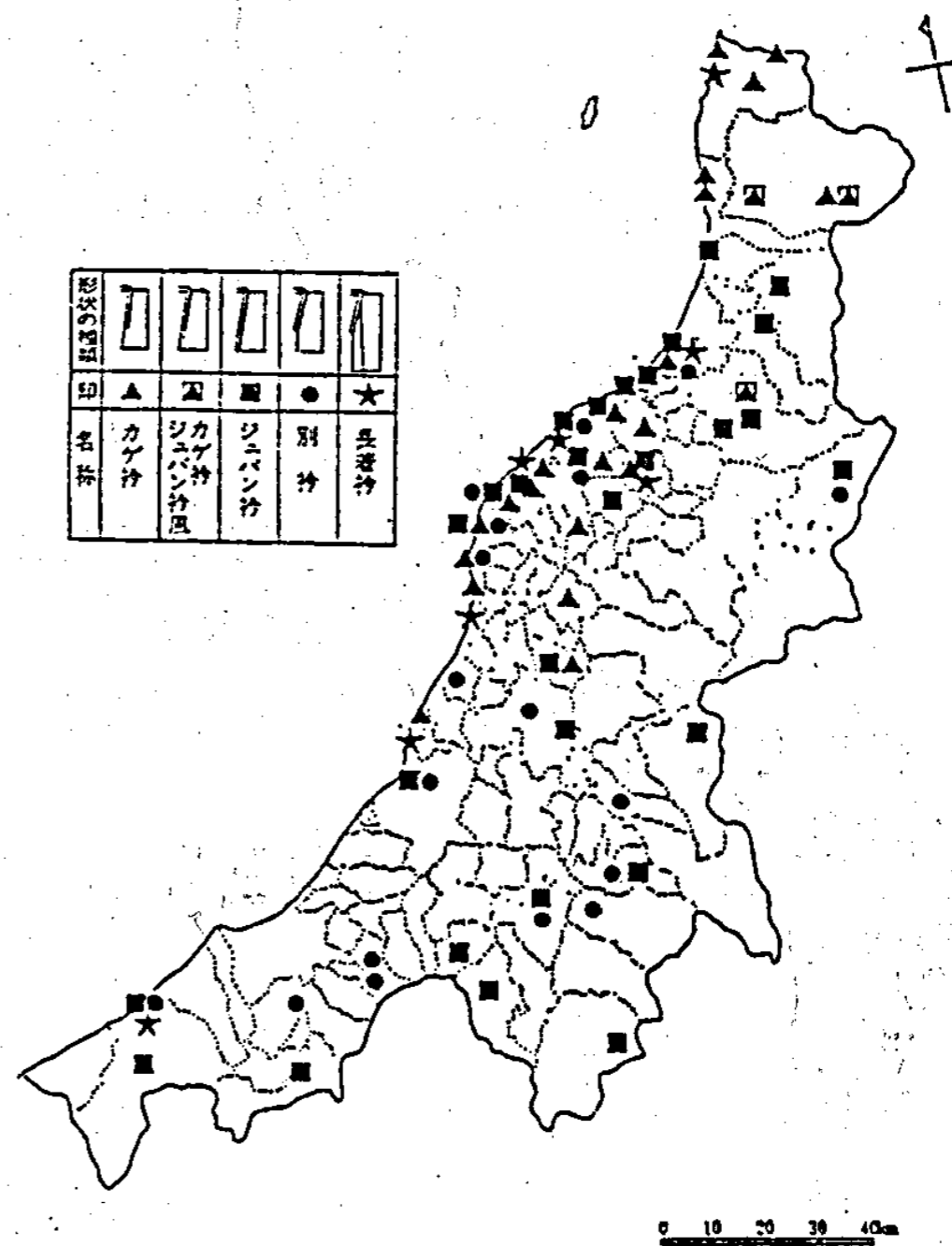


図6 新潟の仕事着の分布—衿型—
(資料 j - 161頁)

らみても、日本海域では、越後の辺りが、東西の文化の吹き溜まりの境界領域だったのかもしれない。

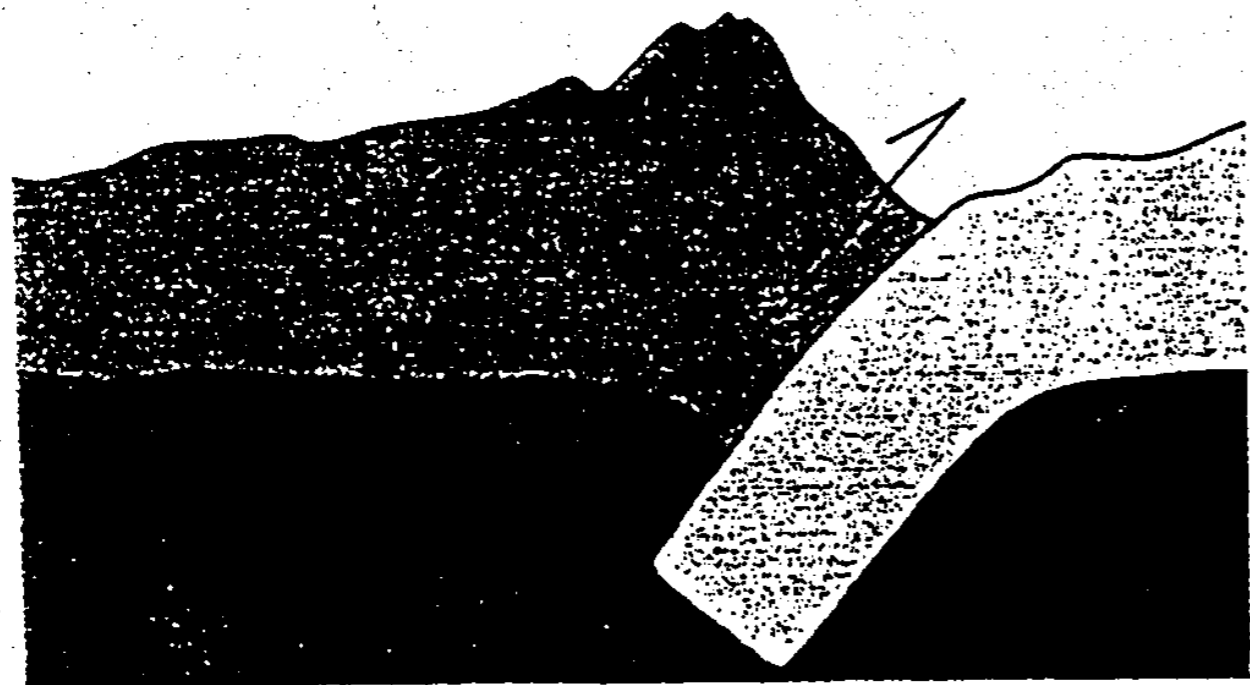


図10 東西日本の境界線フォサマグナ
(資料「フォサマグナ探訪」12頁 糸魚川市)

3. 日本海文化領域の服飾様式の伝播

次に、日本海域と服飾とのかかわりについて整理してみたい。冒頭に述べたように新潟は環日本海圏への関心を強めており、衣生活文化に関する交流もはじめているが、まだ、地域的な文化領域を設定して研究するところには至っていない。しかし日本海域については、日本在来の衣料、裂き織り衣などについて若干の調査研究を試みているので、日本海域とのかかわりについて整理してみたい。

まず全国の、ツツレ（裂き織り）、ドンザ、サシコ

ポト、アツシなどの分布地を調べ、その所在県とともに数量化三類でパターン分類をすると、大まかな分け方であるが、東日本と西日本の領域分けのほか、太平洋域と日本海域とにも分けることができそうである（資料e-46~47頁）。

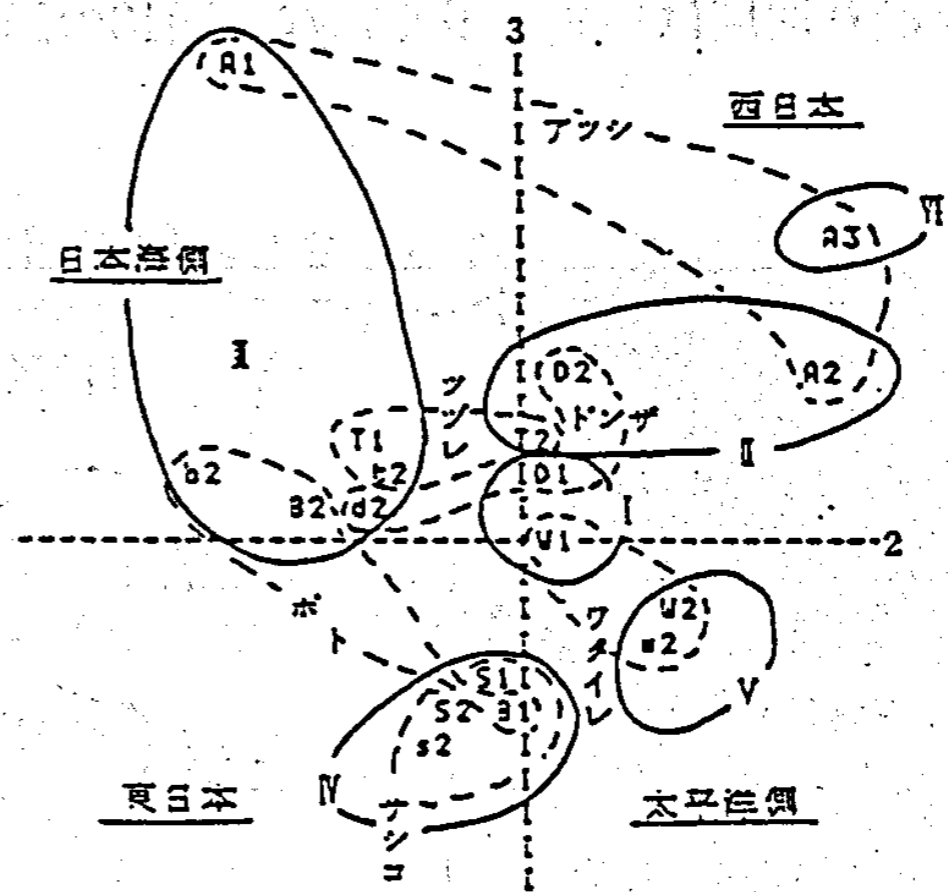
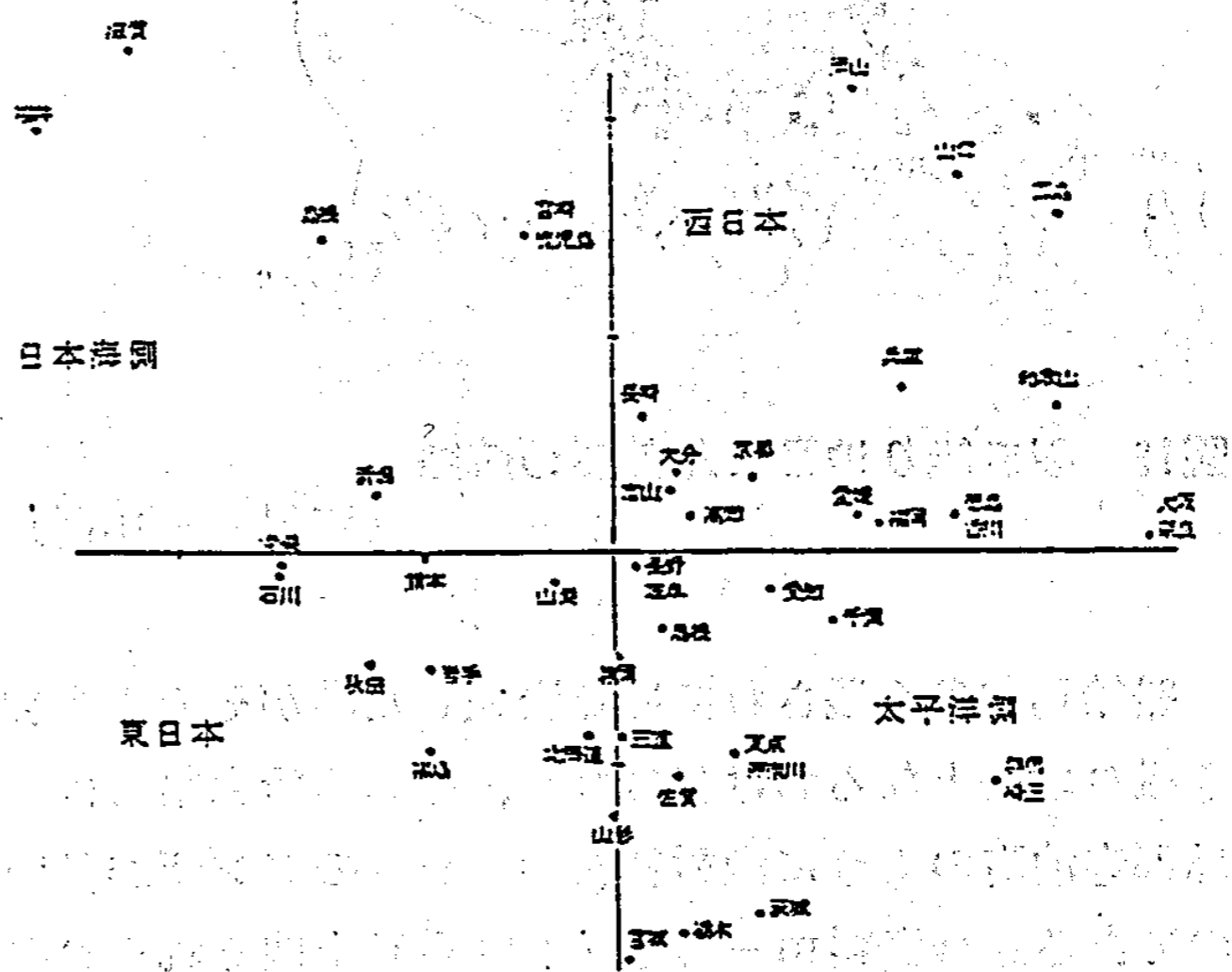


図11 ツツレ（裂き織り）サシコ類の全国分布
(資料e-47頁)

その中で特に裂き織り⁹⁾に焦点をあてて日本海域とのかかわりについて位置づけたい。

9) 裂き織りは、経糸には麻や藤や木綿などの太い糸を用い、緯糸には古木綿布を細く裂いて糸の替わりに織り込んだ織布のことであるが、ここではその布によって出来た仕事着を指す。

裂き織りは、その素材となる古手の木綿が、大阪などの上方から北前船の日本海の西廻り航路によって運ばれることによって江戸時代から各地で織られるようになったようである。実際、北前船の主な寄港地と裂き織り地帯を重ねあわせると図12のようになる。

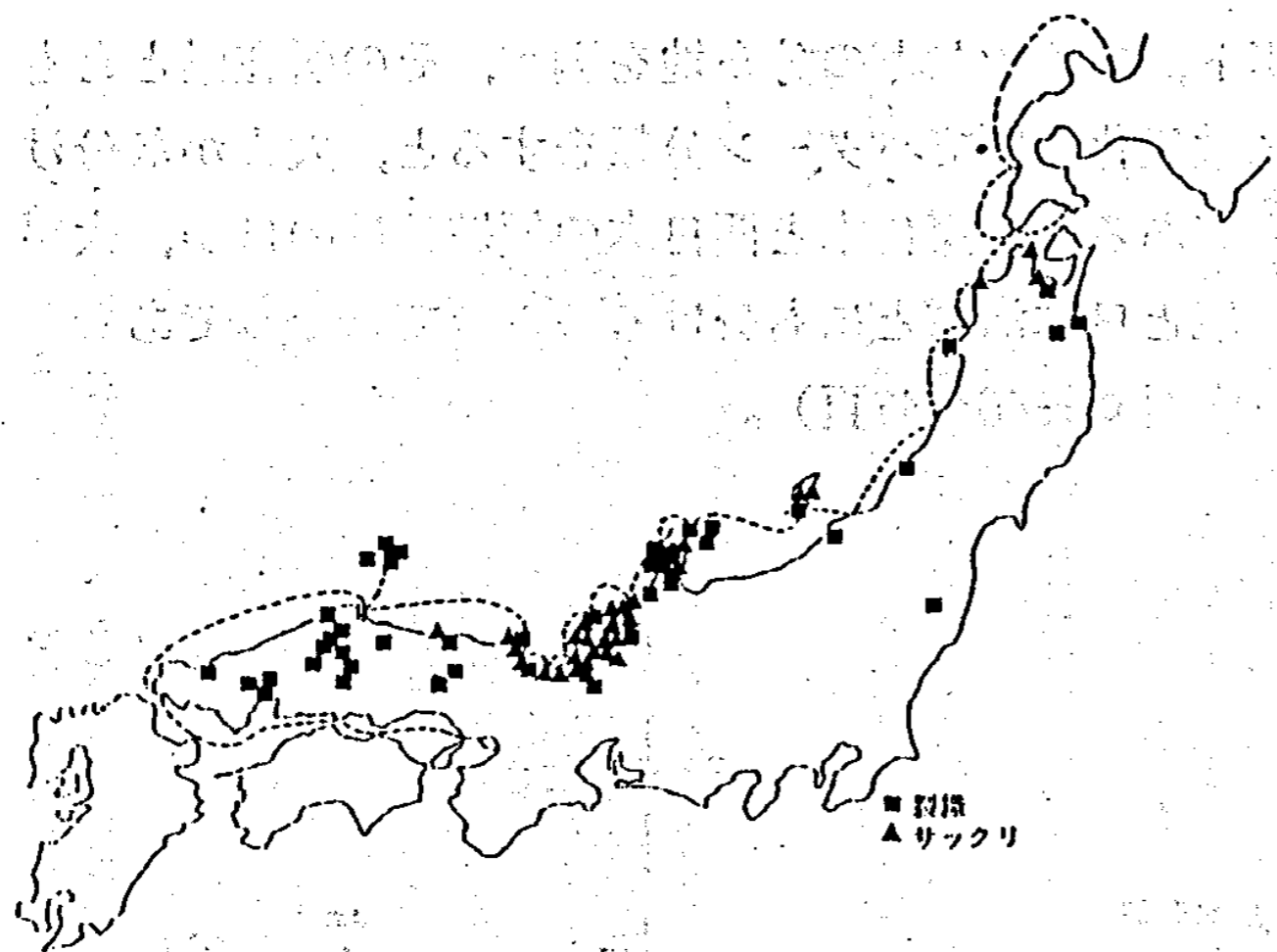


図12 裂き織り地帯と北前船の航路
(資料 q - 10頁)

船絵馬が多く残されている繁栄した港がそのまま裂き織り地帯となるわけではなく、むしろ新潟県では三島郡寺泊町のように漁村特有のサシコのドンザが多いのであるが(資料 m - 242 ~ 248 頁), 土地それぞれの事情で裂き織りが織られていないようである。新潟県内の裂き織り地域はあまり多くはなく図13の通りである。

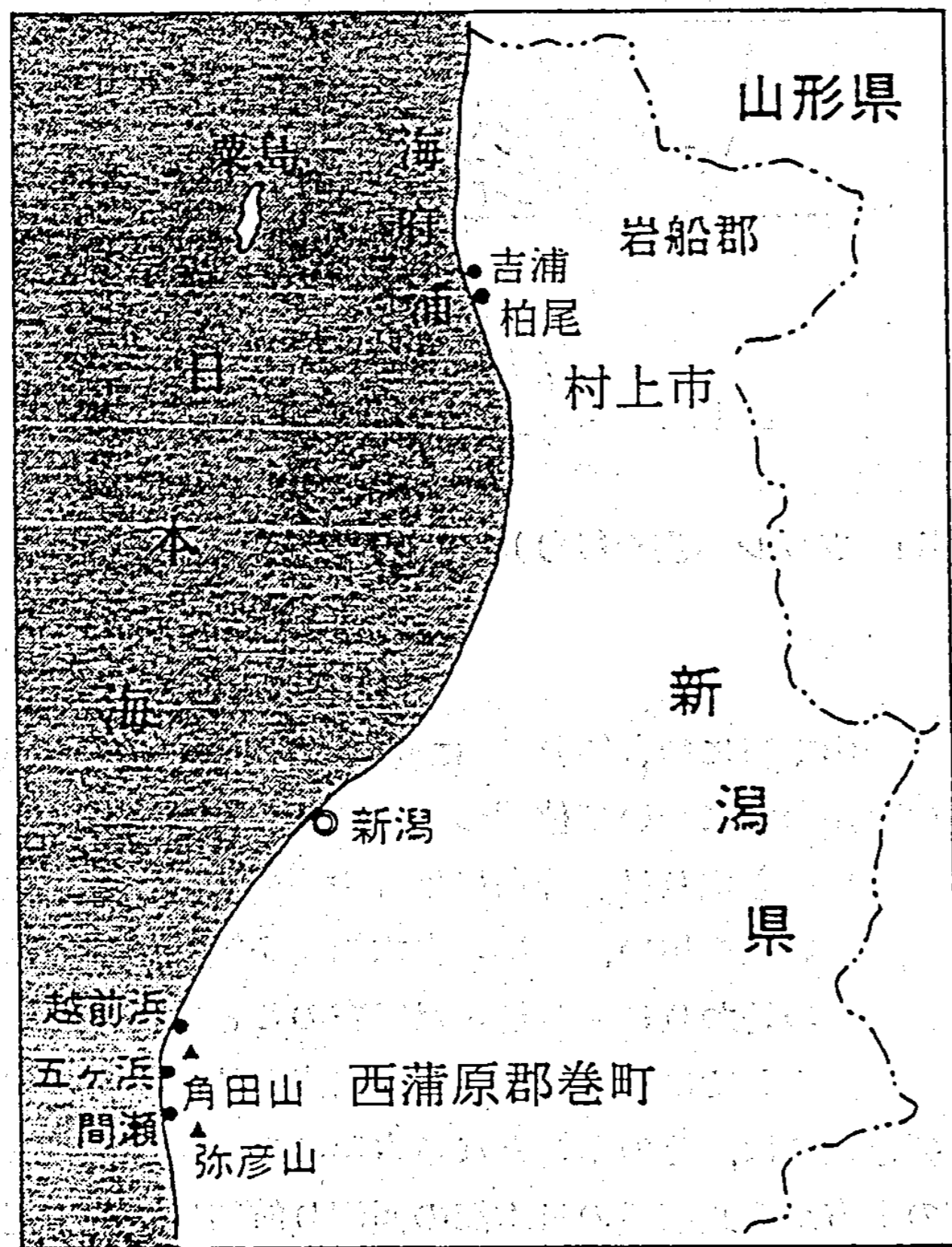


図13 新潟県内の裂き織り地帯 (資料 f - 26頁)

新潟県村上市上海府地区の柏尾・吉浦は藤布織り地帯で、防寒用仕事着でクサオツツレとよばれている裂き織りがあり(資料 a - 77 ~ 79 頁 d - 22 ~ 24 頁), 新潟市周辺の漁村でも労働用に丈夫なサキオリを織って着ていたところもあるが(資料 f - 26 ~ 27 頁), やはり新潟県内の裂き織りの圧巻は西蒲原郡巻町のツツレ・サシモンである(i - 81 頁 u)。

巻町の裂き織りの詳細についてはここでは省くが、巻町の日本海域の裂き織り技法が、図14にみられるように、石川県の能登半島から、また新潟側にも越前浜という地名があることからわかるように福井県から人々とともに海をわたってもたらされたものであろうことは、先きに調査研究で明らかにした通りである(q - 9 ~ 35 頁)。

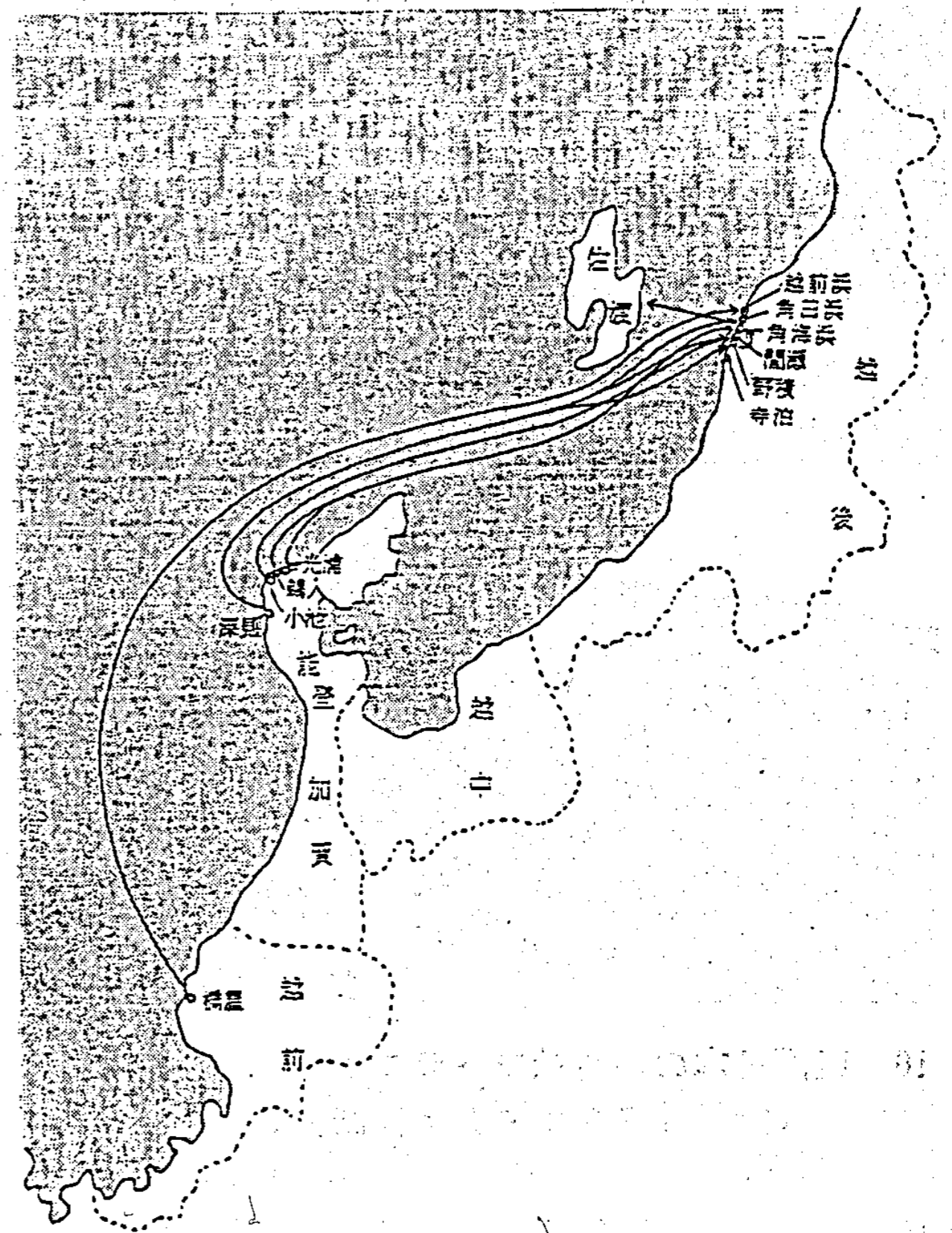


図14 越後と能登の裂き織り文化領域の交流
(資料 q - 15頁)

さらにまた、その裂き織りには珍しいツツレ・ツツリという呼称の地域を日本海域に探すと、遠く海を隔て、山陰地方に至ることがわかり、山陰・能登・越後を結ぶ裂き織りの伝播の道のあることもわかった(q - 29 ~ 30 頁)。

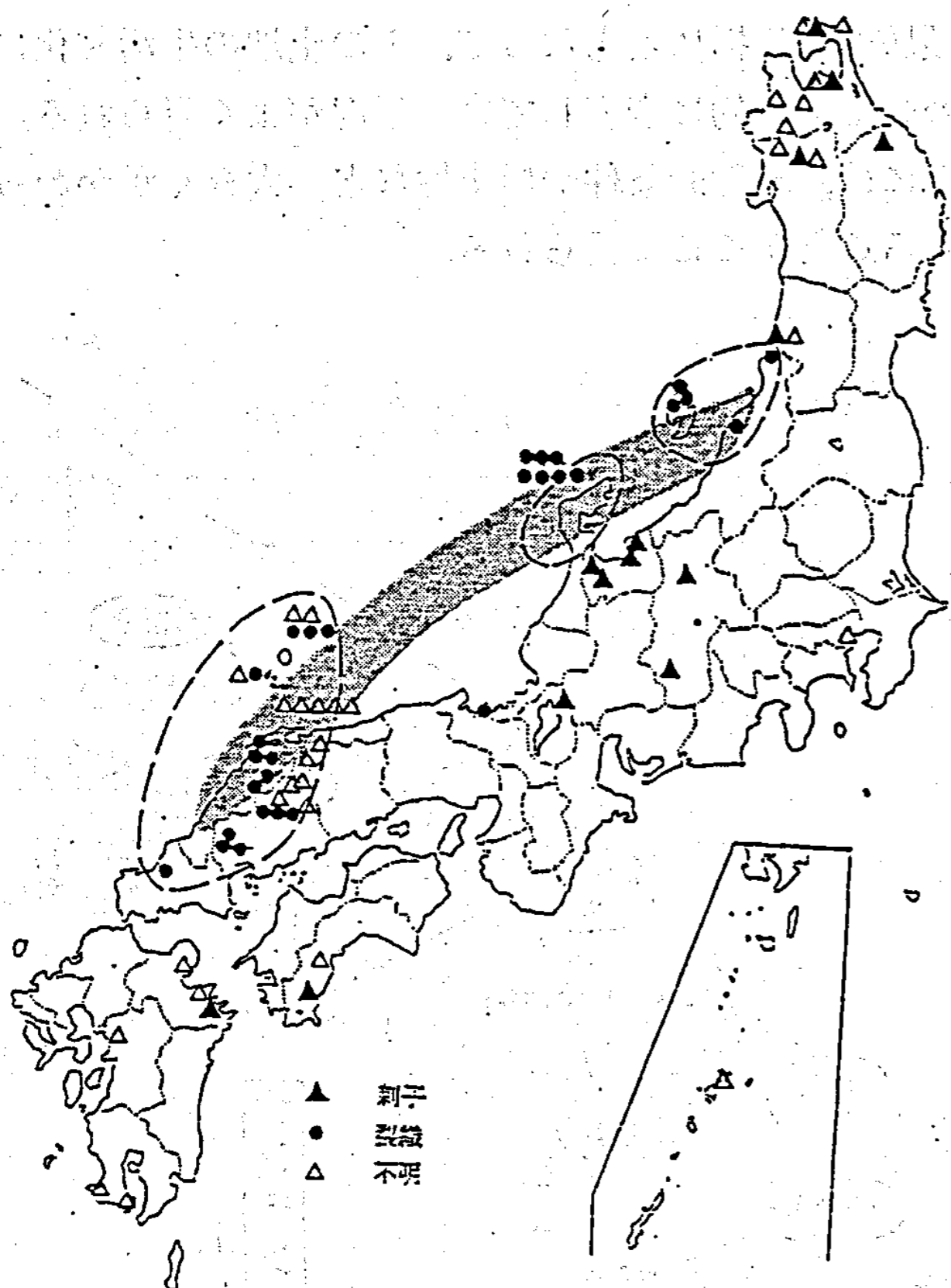


図15 ツツレ（裂き織）の通った日本海域の道
(資料 q - 30頁)

4. 新潟地域における服飾様式の変容

その他服飾の伝播の様子についても、先の新潟県の中央部にある長岡市史の聞き取り調査などから知ることができる(資料 s - 各地域)。

まず、下衣の伝播経路や時期についてであるが、さして広くもない長岡地域の山あいのゴシマキ地帯の村々に、東北の山間部ではかれていた山袴が、早いところでは大正期や昭和初期に、それぞれ異なる周辺地域から伝播してきている。はじめはその形が、脚部分が細く脇が開いて尻部分がだぶだぶと大きく不格好のため「猿回しのような」と嘲笑を浴びせられていたが、2~3年を経るとその便利な機能性のゆえに普及して行く。

市域内での伝播は少なく、ほとんどは個別に時期を違えて入ってきているが、中央を流れる信濃川を挟んでの川も東と西では、やはり文化領域が異なるようであり、呼称もサルバカマとサンパクと違いがある。もっとも昭和11年以降は、サルバカマ・サンパクの山袴状のものであっても最初からモンベと呼ばれており、また仕事着の短衣化、シャツなどの下着の洋装化の普及、戦時態勢などという時勢にあわせて少しずつ形状が改良し、まもなく第二次世界大戦中のモンベに連な

ることになる。
ここでは、地域的な服飾様式の伝播とともに、時代の流れにともなう服飾様式の変容がみられる。

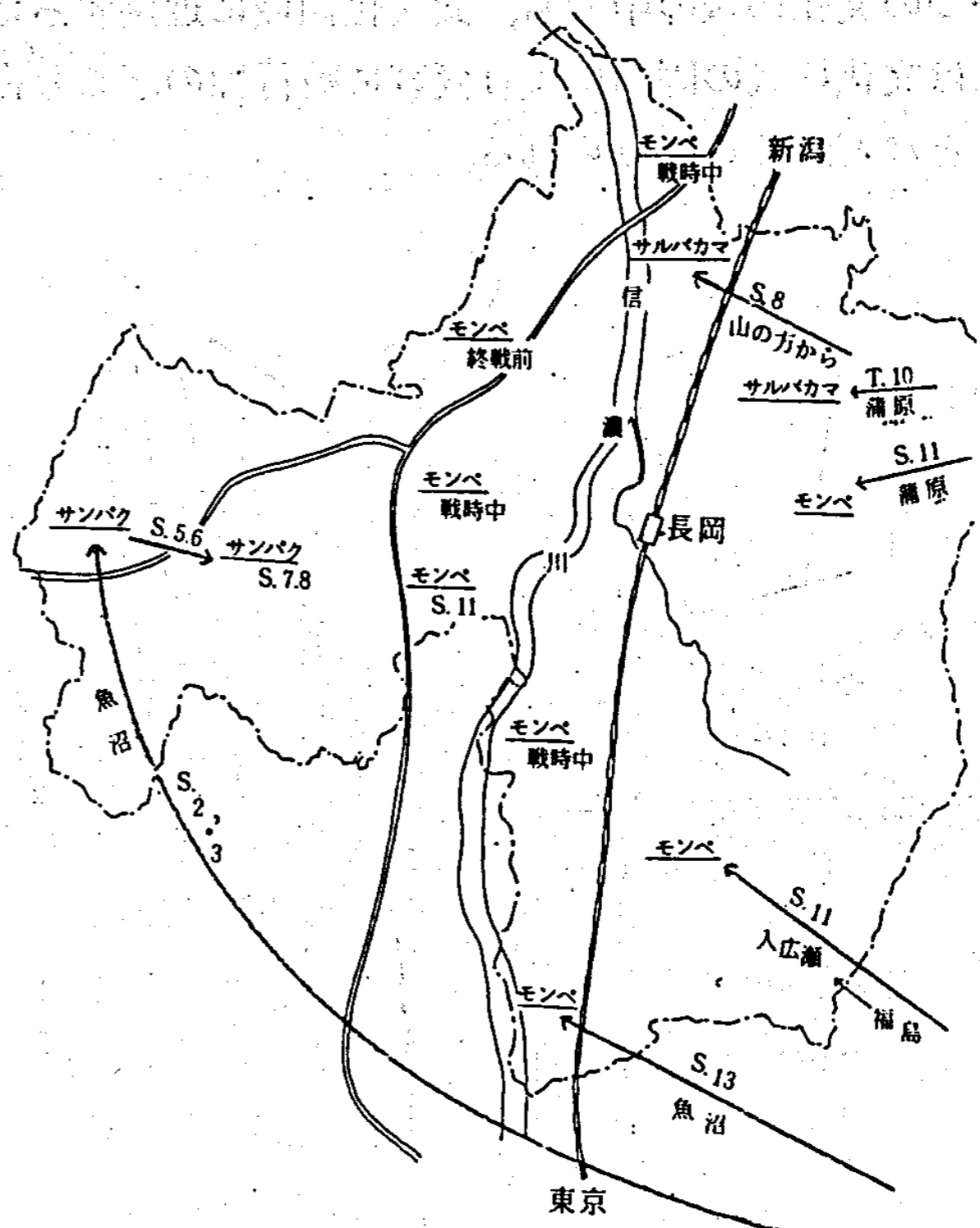


図16 長岡市域へのサルバカマ・サンパクの伝播経路と時期(資料 V)

地域間の伝播と変容については同じ長岡市域につきのような例もある。

信濃川の西側にフロシキカブリという色・柄物の四角い布を三角に折ってかぶることが昭和初期から流行しているが、これは田畑の平場を隔てた西蒲原郡にも多い。巻町(西蒲原郡)の調査によれば、それは長岡からきたゴゼさんの被り方の影響によるものらしく、場合によっては長岡からの伝播したものの逆移入かもしれない(資料 u)。胸当てのついたアテマエカケも蒲原郡の稲作地帯から来たものであろう。この分布は信濃川の川西部にかぎられるが、信濃川の氾濫によって川西の一つの村が川東にも分断した地域にかぎって、川東部もフロシキかぶりとアテマエカケのあるところが面白い。

いずれも、旧来の手拭かぶりや、短か前掛けという服飾様式が、地域間の交流によって、小規模ながらも異文化領域の包摂がおこなわれ変容してきたことがわかる。

また、長岡市川東部の見附市の機業地に隣接する地

帯では、娘のハタ屋勤めや嫁の出バタなどでハタ織り技術が温存され、また織り物用材料も豊富だったため自家用衣料を織り続け、市販の反物への転換が遅れている。

一つの文化領域の中でも、異文化領域に近接する地域には文化様式の固執により変容に跛行性の起こり得ることなどがここにみられる。

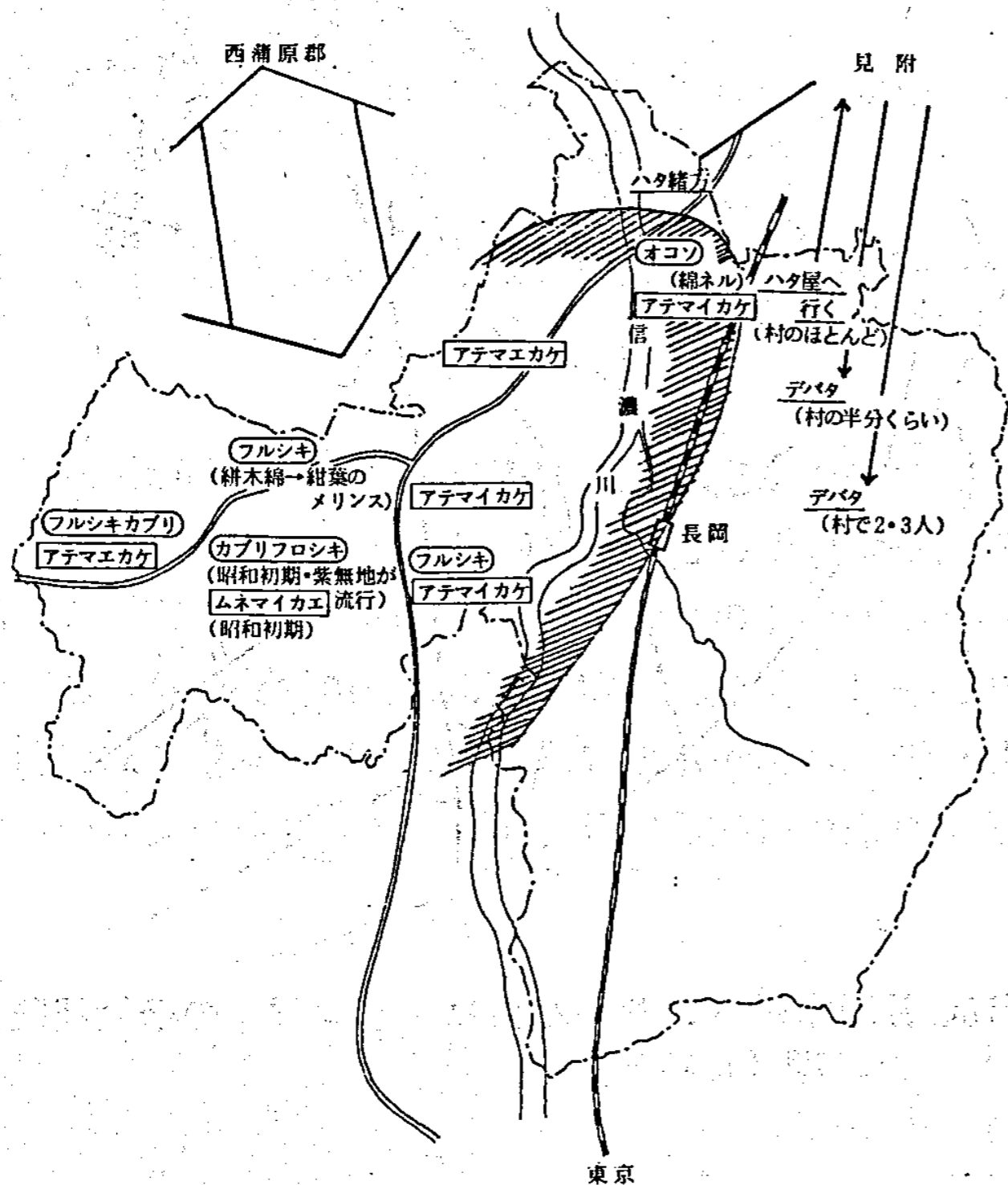


図17 長岡市域の被り物・前掛けなどの伝播(資料 r)

ところで、服飾様式が異文化に接して変容をきたす例は、先の裂き織りのツズレが日本海航路をわたって越後にたどりついていてから、内陸部に浸透する過程で顕著にみられる。

初めは大袖のついた地厚な紺無地のツズレとして織られ、漁師によって着用されていたようであったが、漁業の不振にともない、まもなく袖をもぎ取って海ぞい地域の山仕事用の荷担ぎ用袖無しとなり、内陸部に向かって山を越えた反対側の山麓では、紺色から色縞に変わって薄手織りの袖無しの荷担ぎ用の裂き織りとなる。さらに農村の平場に波及して、今度は色縞の防寒用裂き織りとなり、加えて藁仕事用の二幅の前掛けとなる。呼称もツズレからサシモンへと変わっていく(資料 q-16~19頁 u)。

裂き織りという一つの服飾様式が、漁村の漁の仕事と山仕事、山麓の山仕事、農村の冬仕事と、異なる文

化領域への伝播にともなって、その土地の生活文化に合わせて機能的に変容していく状況がよく見られる。そこには、地理的条件や風土性などが大きくかかわってくるのがここに見られる。

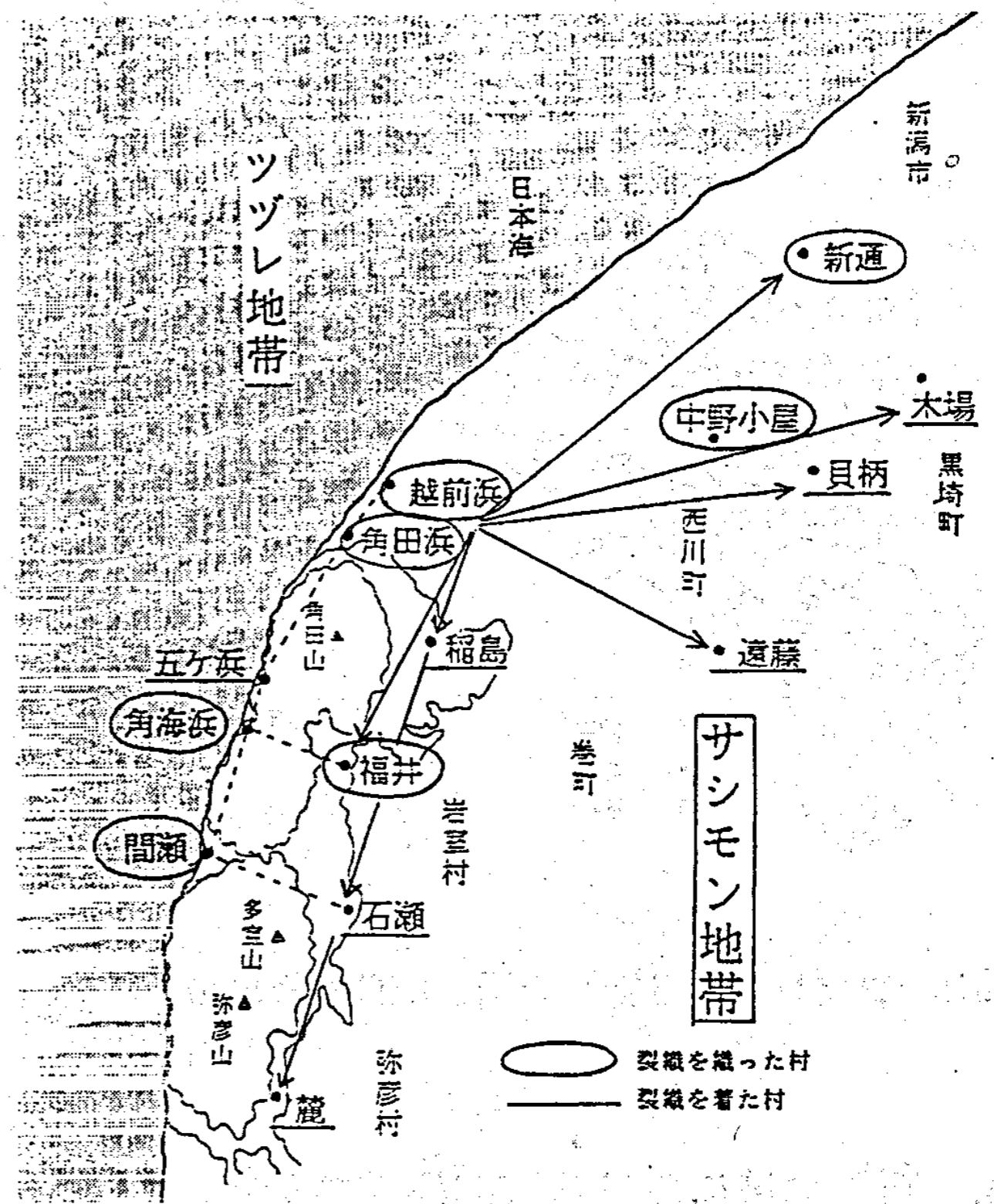


図18 裂き織り文化の地域的変容 (資料 q - 16頁)

ところで、ここに、C・レヴィ=ストロースの示唆に富んだ法則性がある。

すなわち、「一つの集団から他の集団へと造形的な形が保有されるときには意味上の機能は逆転する。反対に意味上の機能が保有されるときには造形的な形の方が逆転する」(『仮面の道』128頁新潮社) というもので、その具体的な例は、わが国の宝飾の歴史としての見地から、縄文時代に新潟県の県西部にあった翡翠(硬玉)について考古学の知見に基づいて先に見たところである。(資料 k-69~70頁 o-87頁)。

硬玉の翡翠は、縄文前期、中期、後期・晩期、弥生古墳時代と時代を経るに従い、硬玉製大珠などの大型の翡翠製品が個数の多い粗形の勾玉・管玉などの小形品になって多用され、その後次第に典型的な勾玉を完成している。また一つの時代を例にとってみると、希少価値の高い翡翠の代りにメノウやコハクなど素材を転用することで流行を生み、神秘性から装飾性へと意味が変容していく様子が見える。

これは文化領域の異文化の包摂などの変化に伴って一つの様式が、通時的にまた共時的に変容していく様子を集約した典型的な例といえるだろう。

おわりに

服飾様式の時間的あるいは空間的変容と文化領域のかかわりについて、これまでの各種の調査結果などを資料に用いての検証を試みた。

いずれも、時代と地域によって定められた、時・空間の座標軸の1点で服飾様式が成り立つが、異文化領域との接触という三次元の軸によって、服飾の様式は新たな彩りを加えて鮮やかに変容することを、幾つか見てきたような気がする。わが国の服飾史の様式の変化にみる型の変容の激しさは、その三軸目の、外来のあるいは内部で発生した、多数の異文化との接触の結果であろう。また仕事着の下衣にしても、裂き織り衣にしても、他地域というあるいは時代の変化という異文化に接触して、小さな歩みながらも、あきらかに転換し変容していく様子を、境界領域らしい要素をもつ新潟地域の服飾様式を足がかりとして確かめることが出来た。

しかしさらに、時・空間、文化領域いずれをも含めて、服飾様式の変容に大きくかかわるのは、風土性と地理的要因ではないかと考える。

一文化領域を形づくるものも風土性であるが、その変容をうながす異文化の移入は地理的条件に大きく左右される。これまでのわが国の、異文化の自然的な導入、また積極的あるいは非積極的吸収や意識的拒絶なども、大陸から少し離れた島国であったからこそ成ったものであり、それらの波が多くの様式の変容を生みさらに風土性のフルイの目をかい潜って、さらに歴史的要因などが錯綜しながら、独自の文化をつくり、その結果としての所産の一つが特有の服飾の形成となったものであろう。裂き織り衣にしても、船舶の通りやすい西まわり航路をもつ日本海域という地理的条件なしではその存在は考えられず、また風土性についても湿度の高い機織り土壌のことなども含めて同様のことが言えそうである。

古くは、環日本海圏の対岸の文化領域は、北から、あるいは西南の方から海を渡って日本の服飾様式の変容に大きな影響をあたえたが、長い空白期間をおき、科学技術の進歩した今日、生活文化の異なる文化領域間の接触は、日本海を一足跳びにして、これからはどのような面に変容をもたらすのであろうか。そのとき

日本海域側の東西文化の境界線にあった新潟地域は、今度はどのような領域に位置することになるのだろうか。

<資料>

本研究のための直接、間接の資料として用いた調査研究の資料は下記の通りである。(いずれも山崎光子の単著)

- a) 「越後の民俗服飾 藤布衣について」『風俗』14巻3号 昭和51年3月
- b) 「越後の民俗服飾—覆面頭巾ドモコモ—」『衣生活研究』19巻20号 昭和51年12月
- c) 「野の女の働くことと着ること」『家庭科教育』54巻15号 昭和55年12月
- d) 「上海府の藤布 村上市柏尾・吉浦」『新潟県産業遺跡の旅』 昭和57年4月
- e) 「シンポジウム仕事着研究の現状と課題—機能と分布からみた刺子類のパターン分類—」『第9回民具研究講座講演要旨』昭和57年10月
- f) 「裂織・新潟」『染織α』34号特集 昭和59年1月
- g) 「覆面頭巾どもこも—江戸の覆面と東北日本海沿岸の覆面—」『生活文化史』5号 昭和59年10月
- h) 「三面のかぶりもの—オッカブリとブシー—」『新潟県民俗学会誌 高志路』276号 昭和60年7月
- i) 「浦浜の衣生活—五ヶ浜の聞き取りと角海浜の服飾から見た—」『巻町史研究』2号 昭和61年3月
- j) 「新潟県(上・中・下越)の仕事着」『神奈川県大学常民文化研究所調査報告』第11集(平凡社刊) 昭和61年11月
- k) 「装身具に見られる形態や素材の転換とその意味—方法論援用の試み—」『家庭科教育』61巻4号 昭和62年1月
- l) 「頸城山村の民俗—衣生活—」『頸城山村民俗文化財報告書』昭和62年3月
- m) 「寺泊町の衣生活」『寺泊町史 資料編4』昭和63年3月
- n) 「刺し子衣」「かぶりもの」「袖無し」『日本の労働着—アチック・ミュージアム・コレクション—』源流社 昭和63年3月
- o) 「宝飾・翡翠の変遷」『シンポジウム古代翡翠文化の謎』新人物往来社 昭和63年3月

- p) 「仕事着からみた衣と装いの文化」『シンポジウム、海からみた衣と装いの文化—古代日本海域の謎Ⅱ—』新人物往来社 平成元年10月
- q) 「裂き織りの通った日本海の道—越後のツツレと能登のツツレー」『日本海文化研究論文集（富山市制100周年記念誌論文集）』平成元年10月
- r) 「仕事着の分布と伝播—新潟県長岡市域の場合—」『日本家政学会 民俗服飾部会 平成2年度研究発表会要旨』平成2年12月
- s) 「長岡市富島・大積三島谷・村松・六日市・才津・黒津の衣生活」『聞き書き長岡の民俗3 長岡市史双書（12）』平成2年11月
- 「長岡市乙吉・日越・百束・河辺・宮本東方の衣生活」『聞き書き長岡の民俗4 長岡市史双書（13）』平成2年12月
- 「長岡市大荒戸・草生津・撰田屋・前島・柿の衣生活」『聞き書き長岡の民俗5 長岡市史双書（14）』平成2年12月

- t) 「東蒲原郡室谷地域の民俗服飾」『新潟県民俗学会誌 高志路』299号 平成3年4月
- u) 「生活伝承—着るもの—」『巻町史 民俗・文化財編』平成4年
- v) 「生活と社会—家族の着物—」『長岡市史 民俗・文化財編』平成4年2月

本編は、これまでの筆者の新潟県内のフィールド調査の結果や、それを筆者の居住する新潟県などを視座の中心に据えて全国的視野で位置づけようとした研究の成果など、これまでに発表した図表等の資料を中心に構築したものであり、財団法人衣服研究振興会の第13回衣服研究奨励賞のテーマ「生活文化と衣服」の論文募集に応募し、受賞した論文である。

受賞論文の概要は、『衣服文化振興シリーズNo.13』（1992年2月）に集録されたが、全文は掲載されないため、ここに、資料として用いた自著の文献や図などの全体を揃えて集録した。